

爆豪はTSしたらかわいい。  
あなたもそう思いませんか？

星デルタ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ツンデレキレ芸ツリ目巨乳幼馴染を想像したら筆が勝手に…

初投稿だから甘やかして♡

# 目次

爆豪はTSしたらかわいい。あなたもそ う思いますよね？	1
第二話	12
第三話	28



爆豪はTSしたらかわいい。あなたもそう思いますよね？

爆豪香月にとって、幼馴染の緑谷出久は気に入らない存在だ。

誰よりも才能に愛された自分にとって、周りすべては自分よりできねえ奴で、守つてやるべき存在だった。

『無個性』である幼馴染なんざ最たるものだ。ピーピー泣いて、俺の後ろに隠れているの  
がいい。

なのにあいつは違った。どこまでも自分と対等に接してくる。自分より弱いのに。  
『無個性なのに』。

はじめは怒り狂った。あいつは自分を馬鹿にしているのだと思った。差し出される  
手を徹底的に拒み、何度も罵倒した。自分をなめるなといった。しかし——あいつは  
あきらめなかった。笑顔で俺に話しかけ続けた。手を差し出し続けた。あいつが妙な  
『個性』を発現しても、お互いが中学生に上がってもそれは変わらなかった。

だから——

——爆豪香月は根負けしたのだ。

「かつちゃん、そんなところで寝ると風邪ひいちゃうよ?」

「うるせえクソデクウ…今日はもうねみいからここで寝る…」

コタツに寝ころんだまま答える。今日はデクと一日中買い物に行って疲れたのだ。雄英受験を目前に控えた今、気分転換としてシヨッピングにゲーセン、カラオケとデクを連れまわした。とても楽しかった——いや、デクは俺様と一緒に遊べて楽しかっただろうが、自分はそこそこだ——が、疲れはいかんともしがたい。帰ってくるなり着替えもせずにコタツに潜り込んでしまった。

「もう、しょうがないなあ…」

動く気配がする。奥の押し入れに向かったようだ。何度も遊びに来ているため、爆豪家の間取りは把握されている。うとうとしていると、しばらくしてデクが戻ってきた。

「ほら、頭上げて」

言われるとおりにすると、後頭部に柔らかな布の感触。枕を持ってきてくれたのだと分かる。

「ちったあ気が利くじゃねえか、デクウ…」

「はいはい」

再びデクが遠ざかっていく。買い物の荷物をしまいに行ったのだろう。寝そべったまま、デクについて考える。

デクが自分にかまひ続けた理由。子供のころは自分をなめてると思い怒り狂ったが、今はその理由を理解している。つまるところ、デクは、緑谷出久は——俺のことが好きなのだ。

(まったく、あいつも身の程つてやつを知らねえよなあ……ガキの時から俺が好きとか、  
 どんだけだつっの！)

好きだから、いつも自分に笑いかけてきた。好きだから、いくらあしらわれてもめげなかつた。つまりそういうことなのだ。まったく、どれだけ自分のことが好きなのだろう！ モテる方の香月ではあるが、ここまで好きになられたことはなかつた。仕方のない奴だ。まったく、まったく！

(つう—————！)

気恥ずかしくなつて枕に顔をうずめる。べつにうれしくて顔がにやついているのではない。分不相応な高嶺の花に手を出しているデクのことを考えて、共感性羞恥が働いているのだ。

もちろん、香月にその気はない。自分はオールマイトを超えるヒーローになるという目標があるのだ。平和の象徴。絶対的なヒーロー。彼を超えて、自分は歴史に名を刻む。

(どうせなら、ベッドまで運んでくれりゃあいいのに——。)

自分はヒーローになる。ヒーローというのは、人々を守るもんだ。まあ、そのなかに、あの自分が好きすぎる幼馴染を入れてやってもいい。あいつはずっと自分に守られていればいいのだ。

(そう、ずっと、いっしょう——)

瞼が落ちる。心地よい睡魔に身をゆだね、香月は眠りに落ちた——。

転生したと思ったら爆豪くんが爆豪ちゃんだった件について。

なんで  
????????

まあいいんだけどね。おっぱい大きいしかわいいし。

ふと気づいたら自分は転生していた。しかもヒロアカの世界に。気づいた時にはそ



れはもう驚いた、自分が赤ん坊になって抱きかかえられているのだから。名前緑谷出久だし。

主人公やんけ！　と思つたが、まあそれはそれ。今ではこの世界にすっかりなじみ、人生を楽しんでいる。個性もなんか知らんけどあつたしね。

「あー、どうしようつかない…」

つぶやきながら大きな木の塊を目の前に置く。到達目標を設定し、個性を発動する。自分の手が意図せぬまま目にもとまらぬ速さで動き、数秒もすると木を削つてできたオールマイトのフィギュアが完成していた。そのままフィギュアに勢いよく手を叩きつけてみると、手がフィギュアを通り抜ける。つぎにフィギュアを本棚へ放り投げるのと、偶然本棚の角に当たり、壁と机を経由して俺の手元に戻ってくる。

「オールマイトフィギュア手作り、3000円からつと…」

その様子をカメラで撮影すると、オールマイトがダイナミックに飛び回るシーンが取れていた。フィギュアの全身像と一緒にヤフオクに出品。個性の訓練かつ小遣い稼ぎをこなし、一息つく。

個性『TAS』。

TASとはTool-Assisted Speedrun（ツール・アシステッド・スピードラン）、またはTool-Assisted Superplay（ツール・アシステッド・スーパープレイ）の略で、まあ要するにゲームにおいて理論上可能でも人体には不可能なことをやるためのツールだ。僕もTASさんの休日とか好きでめっちゃ見てた。

これによつて僕は、理論上できることはたいいできる。人体が出せる最高のハンドスピードでフィギュアを作ることでもできるし、もつとすごいことといえば、トンネル効果で物体を通り抜けることもできる。ケツワープはできなかつた。修行が足りんのかもわからんね。

原作では緑谷出久は無個性であつたはずなのに、なぜ僕に個性が宿つていいのかはわからない。わからないが、まあそんなことを言い始めたら香月ちゃんが一番わからないので、放つておくことにしている。

「勝己が香月つて、読み方が変わつてないのがなんか面白いな…」

爆豪香月。僕の幼馴染で、プライドの高い俺様っ娘だ。そして、女の子である。

原作だといじめっ子だつたようだが、この世界では普通に友達だ。積極的に話しかけた甲斐があつたかな？ どうやら俺様な性格は変わつていないようで、放課後はよく

かっちゃんに連れまわされている。かわいい。今日もゲーセンにカラオケと楽しく遊んでいたのだが――。

「まさかヘドロ事件が今日だったとはなあ…普通にゲーセンで遊んでたわ」

ヘドロ事件。爆豪勝己がヘドロの異形型である敵に襲われる事件だ。この事件をきっかけに主人公はオールマイトにヒーローの素質を見出されることになるのだが、僕はそんな事件に遭遇などしていない。当然、かっちゃんも襲われてなんかない。まさか今日だとは思わなかったのでニュースで見たいそう驚いた。

「原作ブレイクか…僕もいよいよオリ主っぽくなってきたなあ」

まあ僕の性格でオールマイトに認められるとも思わないから誤差だよ誤差。原作主人公のポジションに収まった事にプレッシャーを感じていたころもあったが、今はもう何とも思っていない。原作に縛られすぎるのは止めたのだ。あくまで便利な知識として扱ったほうが精神衛生上いい。

ルミリオン先輩が何とかしてくれるんじゃないですかね…というか透過能力と超身体能力の組み合わせってチート過ぎない？

「おっ、かっちゃんからライン来てる。どれどれ」

いや香月ちゃんキレ散らかしてて草。ヘドロ事件のニュースを見て、自分が関わらな

かったのがよほど気に入らなかつたのだろう。

「でもかつちゃんが危ない事に巻き込まれないのが僕は一番嬉しいよ、っと」

実際原作のヘドロ事件はまあまあ危なかつたはずだ。周りのヒーローは手をこまねいていたし、オールマイトもまさか子供ごとヴィランを殴るわけにも行かなかつたのだから。あそこで出久が居なかつたり、助けるのに失敗していたらどうなつていたことやら。

「やつぱヒーローつてやばい職業だよなあ」

わざわざ戦いたがるかつちゃんはバーサーカー。これだけははつきりと真実を伝えなかつた。

まあ英雄高校には行くつもりなんですけどね。矛盾してるとは思うが、香月ちゃんがどうしても意思を曲げそうに無いのだから仕方ない。

あそこは極めつけの魔境なので、いざという時守れるように近くにおいておきたいのだ。英雄高校はマジでブラック。一年生が何度もヴィランに襲われるとかマジ？ 失望しましたエンデヴァーファンやめます……。

「将来はこう……かつちゃんのサイドキックとかかなあ……事務所開くのつて資格とかいんのかね？」

まあいいや。かつちゃんの機嫌を直すスペシャルな提案でもしてやろうじゃないか。

「明日は連れていきたい場所があるんだけどいい？話したいこともあるし。……お  
お、もう返信が来た」

香月ちゃんめつちや誤字つてて草。なんでだ？

明日は俺の秘密基地に連れて行ってやろう。TASの能力を存分に使ったツリーハウスが近くの山にあるのだ。そこでコーヒーでも飲めば気分もルンルンってわけよ。ついでに最近手に入れた雄英高校の過去問も渡して、実技試験の対策についても話しておきたいしね。

「どうかねかつちゃん、僕の個性の粋を尽くしたツリーハウスは！」

「あ、ああ。なかなかやるじゃねーかデク……」

「あとこれがツテをたどって手に入れた雄英の過去問。先輩が言うには（大嘘）実技試験には街中でロボットを破壊する試験が出そうらしいから、移動能力も並行して鍛えたほうがいいかもね」

「ああ、ロボットね……そ、それで？」

「それで??? えーと、妨害用のロボもいるかもしれないから気をつけてね！」

「そ、そうじゃなくてよ……何かほら、俺に言いたい大事なことがあるんじゃないのか……?」

「大事なこと……? ああ、確かにあると言えばあるかな……?」

「そつそれだよそれ！なんだよ……?」

「かつちゃんなんか今日やけにしおらしくない？まあちようどいいや、落ち着いて聞いてね？」

「お、おう……」

「同じ受験生を助けると救助ポイントが入るらしいから、いつものキレ芸を少し抑えて……つてうわあつ!!」

ツリーハウス見せた辺りまでは機嫌が良かったのに、いきなりメチャクチャ怒りだしてビビるわ。

でも「大事な話じゃねえのか！」って怒ってるかつちゃんに「大事だよ！（かつちゃ

んの) 将来の話じゃないか!」って言ったなら「(二人の) しょ、しょうらい……!?」って急に物凄く大人しくなって、更に上機嫌になってニコニコし始めた……。なんでだ?

## 第二話

雄英高校の受験対策の日々。香月ちゃんはなかなかピリピリしているようだが、俺は気楽なものである。学業は前世の記憶＋個性による超学習で何とかなるしね。

香月ちゃんも同じように全く心配いらぬレベルの実力があるのだが、彼女は主席合格を狙っているからなあ。どんなライバルがいるのか分からない以上、万全を期しているようである。さすががっちゃん。

……レスキューポイントがある以上、たぶん少しでも人助けをすれば楽勝だと思うんだが、言わないようにしておく。前同じ事を言ったらメチャクチャキレられたからだ。「エンデヴァーファイギュア、1500円から……ちよつと安いかな？ まあ別にいいか」

考え事をしながら日課となった個性トレーニングを終わらせる。この個性『TAS』は目標となる結果を頭の中で定めてから発動させなくてはならない。過程はイメージする必要はなく、目標も「できのいいオールマイトファイギュアを作る」くらいの大まかなものでいい。あとは自分でも分からぬままに手が動き、信じられない早さでファイギュアが出来上がっている。そこに俺の意思が介入する余地はない。

「最高のヒーローになって老衰で死ぬ」とでも目標を設定して発動させたらどうなる



のだろうか、と時々考えてしまう。体が自動で動いて人助けをして、そのまま死ぬまで続くのだろうか？ そう考えるとビルの上から下を眺めたときのようにゾクゾクする。希死念慮つてやつ？

まあやらないけどね。くだらないこと考えるのは終わり終わり。香月ちゃんに癒やしてもらおう。

「かつちゃん、受験勉強の息抜きにどっか遊びに行かない？」  
「てめえデク、さつきから全く勉強なんざしてねえじゃねえか」

はい。実はずっとかつちゃんが一緒に居るんですよね。というかここはかつちゃんの家ですね。そろそろ受験も追い込みの時期にさしかかってきたので、最近の休日はたいていいつもどつちかの家で勉強会をしている。

「いやいや、これも立派な個性の訓練だって。削った破片も全部ゴミ箱に行くようにしてるんだから怒らないですよ」

「いつ見ても気持ちわりい動きだが、問題はそこじゃねえつての。俺様が主席を取るの  
は当然として、お前にも次席取ってもらわなきゃ、俺の将来設計にケチがつくじゃねー  
か」

「将来設計ねえ……かつちゃんはともかく、僕の方はそんなに気にしなくていいと思うけど  
なあ。サイドキックつて割と注目度低いぜ？」

「うるせーよ、そりゃあサボる言い訳にはならねえ。雄英の主席と次席が揃ってプロヒーロー事務所を開くとなれば、マスコミは必ず食いつく。そしたら知名度だつて上がって、ヒーローチャートだつて上がりやすくなる。」

「相変わらず考えることが微妙にみみっちいなあ……。」

ねえ、でも僕にもつといい考えがあるよ」

「ああ？なんだよ。言つとくが、たとえてめえ相手でも

勝つのは俺だ。主席は譲らねーからな」

「いやいや、そうじゃなくてさ。」

結婚したらもつと知名度上がらない？」

「つつつつつ、は、はあ？」

「雄英主席と次席で、ヒーローとサイドキックで、更に夫婦。ここまでくれば多分史上初だぜ？きつとマスコミの食いつきも……。」

「ばつつつつつ、ばあつか野郎が！だ、誰がそんなことするかあ！」

香月ちゃん顔真つ赤で草。でも悪くないと思うなあ。どうせいつかはする事になるだろうし。爆豪家のウエルカムぶりといったらヤバイぜ？ いったったか、我が母への

お裾分けとして渡された紙袋にこっそりゴムが入ってたときには流石に冷や汗が出たもんな。「あら、だって自分で買うのは恥ずかしいでしょう?」じや無いんだよ。使わないし、そもそも相手側の親から渡される方が100倍恥ずかしいわ。

「テメーはそりやあ俺みたいな高嶺の花と結婚できれば万々歳だろうが、俺は超高収入イケメンと結婚すんだ!お、おまえみたいなクソナードお断りだね!　そ、それに……」  
(照れているかつちゃんも可愛いなあ)

うん、それに?」

「そ、そーゆうのを、目立つための道具として使うのは、やだ……」

「」

「な、なんか言えよ?　なんで黙ってたんだよ」

「うん、なんか急激にやる気出たよ。今なら全教科満点だつて取れる気がする」

この後メチャクチャ勉強した。かつちゃんは時たま乙女を出してくるから心臓に悪いぜ……。自分が物凄く汚れた人間になった気分だったよ。

「マ、ママア……」

「あら香月、もう出久君帰ったの？ どうしたのそんなに暗い顔して」

「出久に、お前みたいなのやつと結婚なんてしないっていつちやったあ……」

「あらあら、そんなこと言ったの」

「ダメだぞお香月、そんなこと言ったら」

「うう……。パパ、ママ……。出久、あたしの事嫌いになったかな……」

「あらあら抱きついちゃつて。だいじょうぶ大丈夫、そんなことないわよー」

（この子ももつと素直になればすぐ上手く行くとと思うのにねえ……。やっぱり思春期って難しいのね）

「大丈夫だぞ香月、もし嫌われたらパパのお嫁さんになろうなー？」

「うるっせえぞジジイ！」

「!？」

さて、そんなこんなで時は過ぎていき、今日は雄英の入試本番である。すでに筆記試験は終了しており、後は実技試験を待つばかりなのだが。

「さて、かつちゃんは上手くやれてるかなー」

とうとう入試当日を迎えた香月ちゃんはいつになく緊張していて面白かった。香月ちゃん、緊張すると周りにあたり始めるから分かりやすいのだ。絡み方もいつもと違って、やや小動物的な雰囲気が出てくるし。

「まあ、手作りのサポートアイテムも渡してるし大丈夫でしょう」

TASの能力って物作りに一番向いてるような気がしなくもない。こんな感じのものがほしいなー、と思うだけですぐに作れてしまうのだから。

ちなみに渡したのは原作でもかつちゃんが使ってた籠手である。かつちゃんの個性は『爆破』と言って、手のひらの汗腺からニトロ口化合物を分泌することができるのだ。

……手のひらから爆発物が出るって、正直めっちゃ危なっかしい個性だと思うのだが。使いこなせるのは本人の類まれな才能によるものだろう。爆破の勢いで自由自在に空を飛び回るのはなかなかかっこいい。

かつちゃんに渡した籠手は彼女がかいた汗をストックする機能がついていて、より爆発の威力を高めることができる他、いざというときはデカイ一発を撃つことができるようになってる。これがあれば0ポイントの敵にも安心だぜ！

「あー、しかしどうしてかつちゃんと同じ会場じゃなかったんだ。やる気でないぜマジで」

約束した以上、次席を取れるよう努力しようとは思うが。どうせなら同じ会場でかつちやんの勇姿を見たかったし見てほしかった……。こつそり会場移ったらだめ？ほら、雄英の校風は自由が売りつて言うし。

「プリントには4種の敵が記載されています！ 誤載であれば日本最高峰たる雄英において恥ずべき行為！ 我々受験者は規範となるヒーローのご指導を求めてこの場に座しているのです！」

うわつ、ビックリした。伏せていた頭を上げてあげて辺りを見回すと、いかにも委員長長然とした少年が教師に食ってかかっていた。

ま、まさか彼は……原作登場人物の飯田天哉くん!?

いやあ、改めてヒロアカキャラを見ると感動するなあ。原作に縛られないとか言った気はするが、それはそれ。原作の登場人物に会うとつい嬉しくなってしまう。だって彼らの内面つきちゃんと描写されてて、善人であることが分かりきっているんだぜ？ 信用するのにここまで根拠はないだろう。

そうか、彼と同じ会場だったのか……。ということはどこかに麗日お茶子ちゃんもい

るのかな？ 僕にはもう香月ちゃんという心に決めた人がいるが、あのうららかフェイスは拜んでおきたいぜ。

うん、ちよつとやる気が出た。TASで「次席になれる成績をとる」とでも設定してサボろうと思つてたけど、神聖なる受験においてそういう不正行為みたいなマネは良くないよな、うん。真面目に正々堂々と受験すべきだ。

「ありがとう原作キャラよ、君たちのおかげだぜ」

「ついでにその縮れ毛の君！先ほどからボソボソと気が散る！」

注意されてしまった。この髪、ストレートパーマかけてもすぐに元に戻るんだよなあ……。

さて、ところ変わつて受験会場である。スタート地点に集められた受験生たちは皆緊張と興奮が入り混じつた顔をしている。国内最高峰の雄英高校を受ける者たちなのだ。きつと地元では天才と崇められている人も多いだろう。自信に満ちた顔つきからそれがわかる。

でも倍率3000倍は普通にやばいよなあ。対魔忍かよ。この会場も想像以上にキチンとした町並みだし、金のかかり方えげつなく無いか？ お？ 資本主義の闇か？

一度鎌と槌を握っておくべきか？

資本の格差と言う打破すべき現状について思いを馳せていると、ふと首筋にピリついた感覚が走る。そろそろスタートが近いのかな？ 個性の副作用かなんなのかは知らないが、何故か僕は物凄く勘がいいのだ。

誰にも悟られないように足に力を込め、全身に力を貯めていく。

イメージする。

僕が地面を踏みしめるごとに、体の中をスピードが循環していく。

体の中に溜まったスピードは膨れ上がり、今にも解放の時を待っている。

今。

今。

今！

「はいスタートオ！」

「イイイイイイヤツフウーーーーー！！！！」

やったぞ、ついにケツワープ成功だ！しかもケツからじゃなくて普通に走る姿勢でできたのは初めてじゃないか!?

周りの景色がどんどん後ろに流れていく。体にすさまじいGを感じながら、僕は見えしてきたロボット群に向けて手を振り抜く。



「T A S流、裏技その1！『すり抜け＋強制ハッキング』！」

僕の手のひらが3 Pロボットの装甲に近づき、近づき、そしてすり抜ける。

量子トンネル。詳しい説明はしないが、全ての物質が分子で構成されている以上、そこには微細なすき間が存在し、奇跡的な確率でそのすき間同士が噛み合えば、壁だつて通り抜かれるという現象だ。

そしてT A Sにおいて、1%とはつまり100%と言うことだ。どんな天文学的な確率だつて、僕は必ず成功させることができる——！

すり抜けていった手が、偶然そのロボットの制御チップに触れ、そしてその刺激が偶然致命傷となり壊す。

そのまま周りのロボットにも次々に触れていく。『ブッコロス！』などと物騒なことを言いながら殴りかかってくる奴もいるが、彼らの攻撃は全て僕の体を通り抜けていく。

30秒も経つと、周りのロボットは全て動かなくなっていた。外傷は全くないのに、致命的にブツ壊れてしまっているからだ。

キレイな顔してるだろ？ 死んでるんだぜ、そいつ……。

「これで20ポイントくらいか？ 意外と先が長いな……」

ここでモタモタしていると他の受験生が追いついてきそうだな。レスキューポイント

の存在を知っちゃってる以上、誰かを助けに入っても不自然になって結局ポイント貰えなさそうだし、効率よく敵ポイントを稼いでいかなきゃね。

試験開始から結構たつたな。あの後も敵ロボットの壊して行って、今は70ポイントくらいだ。もうここらへんでいいだろう。多分。0ポイントの巨大ロボットが出てくる前に終わらせれたし、結構いい感じじゃないか？ さすがTASさん、さすがタスつてね。

「かつちゃん頑張ってるか見たかったなあー」

サポートアイテムの籠手もあげたし、一緒に特訓して強くなってるしで確実に原作よりも良い点数を取っているであろう香月ちゃんのことになった仕方がないぜ。

そうそう、籠手をあげた時も可愛かったんだよ。香月ちゃん、荒っぽい面と乙女な面の2つがあつてさ。その二面性がまたかわいいんだよなあ……。

「うおつとおっ!」

香月ちゃんの秘蔵エピソード集その1、『ベッドで僕の写真に語りかけてた』を思い出していると轟音と共に地面が揺れ始めた。

「いやでつつかないなあアレ!」

想像以上だ。知識としては知ってたけど、実物を見るとやはりその迫力に圧倒され

る。

これを高校入試に出すとかマジ？ 見た感じ鉄製だし、どんな安全対策をとつてもこれで死者を出さないのは無理だろ。今まで死亡事故が起きなかったのは幸運だよ。

一応巻き込まれた人がいないか見ておくか。レスキューポイントを取ると不自然なる云々というより、人の道に反するわ。

「うわっ……」

なんかうららかそうな人が転んで動けなくなっている。しかもちやうどOP敵がこちらにやってきている。不運すぎない？

「その君、大丈夫？ 見た限りだと動けないようだが、もう心配いらぬ。僕がいるからね」

これ、うららかさんです……（肉塊を差し出す）とかになったら寝覚め悪すぎるしね。みすみす見過ごせないぜ。（激ウマギャグ）

「イイイイイイイイイイイイイイイイヤツツツツフウウウウウ!!」

ケツワープで空高く跳躍する。

0ポイントロボットがコマ送りのようにどんどん近づいてくる。何メートルもあるかという巨体の頭上まで跳躍して叫ぶ。

「流石に安全に配慮しなすぎだろ！」

喰らえや！ T A S流裏技その2、『鎧通し十二重の極み』！」

ロボットの頭を思い切り殴りつける。体がデカすぎるから、直接制御チップに触れることは出来そうにない。だがこの距離で殴りさえすれば、衝撃は届く！ 精密駆動の極致とも呼べる僕の拳によって与えられた衝撃は、全身を駆け巡ったあとにコイツの急所に殺到する！

「ま、僕にかかればざつとこんなもんよ。

……どうやって着地しようね、これ」

刃牙よろしく五体倒立着地は修めている僕だが、この高さつて五体倒立着地が効く範囲内だったか？ なんかやばい気がするな……。

「クソつ、ここまでか！ うおおおお、骨折、かっちゃんの看病、縮まる二人の距離イーツ！」

「いや結構余裕そうやね!？」

お？ 誰かに触られたと思つたらいきなり落下スピードがおちて、体が浮き始めた。隣を見るとさつき助けた丸顔の女の子がニコニコ笑っている。可愛い。

「私の個性、無重力！ 触ったものを無重力状態にできるんよ！」

「なるほど、それでか……。」

よくも僕からかつちゃんの看病を奪ったな!」  
「今からでも落とそうか!」

国立雄英高校、そのモニタールームで。雄英の教師たちが集まり、今回の試験の採点を行っていた。

「いやあ、今回の受験生は豊作じゃないかい!」

あの0ポイントヴィランを倒した受験生が二人!

上座に座る動物が話すと同時に、モニターに二人の人物が映し出される。金髪で三白眼の少女が、ロボットの巨体をそれ以上の爆発で粉碎している。また、死んだ目をした縮れ毛の少年が、何かを叫びながらロボットを殴り、そのまま沈黙させている。

「爆豪香月くんは、レスキューポイントを一切取らずに敵ポイントだけでなんと104点! 3桁得点は史上初じゃないかい?」

更にこちらの緑谷出久くんは敵ポイント74点! こちらも素晴らしい数字と言え

るね！そして彼のレスキューポイントだが……」

「熱さが足りないけど、私は結構いいと思ったわ。同じ受験生の娘を助けるために0ポイントヴィランに立ち向かったんですもの」

「俺もミッドナイトに賛成だ。あれは鎧徹しの要領で中のチップだけを壊したんだよね？ 無力化の手際も大したものだった」

「ふむふむ、なるほど！ 皆なかなか好印象のようだね！ 君はどう思う、イレイザーヘッド？」

教師陣が思い思いの意見を述べる中、動物が再び声を上げる。それに反応して、一人の男性が喋り始めた。ボサボサの髪で、目をけだるげに細めた男だ。

「概ね異論はありませんね。他の様子を見ても、常に最小限の労力でヴィランを倒している。なかなか合理的です」

「イレイザーヘッドも好感触かい！これは彼の合格はもう決まったようなものかな！」

「あくまで合理的といっただけです。それに、コイツは……。」

「ん？ なんだい？」

「いえ、なんでもありません。」

「それじゃあ緑谷出久くんの成績は、敵ポイント74ポイント、レスキューポイント30ポイントの合計104ポイントだ！ さっきの爆豪くと合わせて、この二人が主席合

格だね！」

「おうデク、入んぞー。

何やってんだ？」

「足を痛くないように折る方法ってないかなって検索してた。かつちゃん、僕はおかゆは卵を入れたほうが好みだからよろしく」

「意味わからねーし、たとえば背骨折ったとしてもテメーの看病はしねーよバアカ」

## 第三話

入学試験は僕と香月ちゃん二人が主席合格するという珍しい結果に終わった。僕の両親はえらい喜びようで、その日の夕食はかなりのご馳走になった。愛されててありがたい限りだぜ。

香月ちゃんは念願の主席合格、それも二人揃ってということでかなり喜んでいた。かわい。

目をキラキラさせながら「やったな！デク！」って抱きついてきてさあ……。その後我に返って殴られたけどそのくらい気にもならない。おっぱいがでつつっかいんだ。あの0ポイント敵よりでかいんじゃないか。

あの雄英に二人も合格者が出たというのはそれなりに騒ぎになった。地元の友達とのおめでとう会だったり、先生からの激励の言葉だったり、関わりの無かったクラスの子に告白されて香月ちゃんが不機嫌になったりとイベントが目白押しだったがどうでもいいのでカットだカット。最後のは不機嫌なかつちゃんが可愛かったのでよかつた（コナミ）。





まずかっちゃんのおっぱいばかりに注目してきた今までの自分がいかに愚かだったかという話をしたい。いや、もちろん制服に包まれてその形があらわになった双乳も素晴らしいのだが、何故僕はかっちゃんの太ももという無限のフロンティアに今まで気付かなかったのだろう。かっちゃんはヒーローになるため毎日きちんとトレーニングをしている。当然足にも筋肉がついている。いや、ついているのか？ 分からない。僕が目映るその足はあまりにも柔らかかそうに見えたからだ。おそらく筋肉と脂肪が奇跡的なバランスで共存しているのだろう。ハリがありながら指で押したらどこまでも沈み込んでいきそうな太もも。まさに100年に1度の究極生命体と言えるだろう。あれ？ かっちゃんって個性『太もも』だったわけ？ そんなことを考えてしまうほど素晴らしいかった。スカートというものを考えたやつは天才だが、きつとんでもない変態に違いないぜ。

「はあ~~~~あ……しんどい……むりみがつよい……」

とりあえずスマホを構えて写真を撮っておく。僕の個性にかかればスマホカメラでだってピューリッツァー賞だ。

「すごく可愛いよかっちゃん！ もちろん普段も可愛いけど、制服も新鮮で最高に可愛い!!!」

語彙が死んでるがかっちゃんを褒めちぎる。IQ3000の僕の頭脳は、これによつ

て照れ顔ミニスカかつちゃんという最高 of 最高を拜めるといふ計算をはじき出して  
いるのだ。

住宅街で大声を出すのは普通に恥ずかしいが、かつちゃんの照れ顔の前にはただ風の  
前の塵だよ塵！（平家物語）

「ふふん、だろう？」

あつあつどや顔は不意打ちで死ねる……。

きがつくとわたしはゆうえいについていた

それでもわたしはかつちゃんをほめたかった

だけどかつちゃんはわたしにどやがおばかりむける

「はっー！」

何か長い夢を見ていたような気分だ。いつの間にか雄英高校の教室に到着していたらしい。周りではクラスメイトたちが談笑しているのが見える。かつちゃんも女子たちと話してみたいだ。かつちゃんは意外とコミュ力も高いのである。マウント取りたがるから場合によるけどね。

いやあ、それにしても感動だ。ヒーローの卵、それも金の卵がこんなに。僕は原作で一方的に知ってたけど、やっぱり2Dと3Dって全然違うよね。

あたりを見回してみると、ちょうど入ってきた丸顔の女の子と目があつた。あ、あの原作でヒロインしてそうな癒やし顔は……！

「おお、キミは！ 受験会場で会ったよね、僕のこと覚えてる？」

何かナンパみたいになってない？ 緑谷、かつちゃんよりコミュ力ない説あるなこれ。

「覚えとるよー！ あの時は助けてくれてありがとう！」

あらいい子。方言女子っていいよね……。

そのまま試験トークでわいわい盛り上がっていると、後ろから何かドス黒い視線を感じ

じる。

ねん。  
振り返ると、かつちゃんがこちらをすごい勢いで睨みつけてきていた。いやなんでや

「あのー、デク君。私あの人になんかしちやつたかな？」

「いや全然何にも。ごめんね僕のカノピツピが」

「か、カノピツピ!？」

「おい調子乗ってんじゃねえぞデクウ！ 誰が誰の彼女だオラア！」

「そんな、ひどいよ！ 将来の約束だつてしたじゃないか！」

「将来!?!？」

「嘘つくんじやねえ丸顔が真に受けてんだろうが！ そりやあヒーロー事務所の話だ！」

ギヤーギヤー楽しく騒いでいると、ふと視界の端に寝袋が転がっているのが見える。

あつやべつ、おとなしくしとこ。僕の爆弾発言で周りが騒いでいるが、個性を使って超スピードで着席する。ついにかつちゃんも席に座らせる。

「お友達ごっこなら余所でやれ。ここはヒーロー科だぞ」

寝袋から不審者のな男性が顔を出した。彼こそこのクラスの担任、合理主義者の相澤消太先生である。周りが戸惑っている中、更に続けて言う。

「静かになるまで9秒かかりました。君たちは……合理性に欠くね」

その「君たち」って、僕たちは入ってないですよ？（仲間を見捨てる人間の屑）

ツンデレドライアイマンことイレイザーヘッド先生の強権発動で、我々A組は入学式をブツチして、いきなり身体能力テスト行つた。正直根津校長が喋っている様子を一目見たかったが仕方ない。あれ声帯の問題どうしてるのか気にならない？ 頭脳がいかに良くても肺活量とかしんどそう。

試験自体は特筆すべきこともない。最下位は除籍処分と言われたりしたが、その程度だ。

ちなみに最下位は青山くんだった。さらば青山……と思つてたら除籍は嘘で、僕たちのやる気を引き出す合理的虚偽だったそうだ。まあ知つてたけど。ただ先生が青山くんにも見込みがあると判断するか分からなかったのちよつとドキドキしたぜ。

かつちゃんは何と第一位、僕も17位というそこそこの成績に収まったので、皆で仲

良く帰ろうかという話をしていたのだが――。

「――わざわざ僕だけ残れって、どうしたんですか相澤先生」

このあと皆でカラオケでも行こーぜ！ という陽キャ極まりない提案をしていた男子（上鳴くん）がいたので、せっかくだから混ぜてもらおうと思ったのに。何故か僕だけ先生に残るよう言われて、グラウンドに取り残されてしまったのである。

「緑谷出久。入試では敵ポイント74P、レスキューポイント30Pという優秀な成績を修めて主席合格。たいしたもんだな」

「え？　はあ、どうもありがとうございます……？」

何だ？　どう見ても「これから頑張つてね！」というような雰囲気でもない。相澤先生の眼が髪の間から僕を鋭く見据える。

「ああ、動きもなかなか良かったよ。だがな、どうしても気になることがある。

――お前、途中で手を抜いてただろ？」

「……………」

「わかるもんだぜ、そういうの。試験途中、お前の敵ポイントが70Pに差し掛かったあたりから明らかに動きが鈍くなった」

「別にヒーローになる動機なんて何でもいいんだ。有名になりたいとか、モテたいとか……そこらへんは個人の自由だからな。俺がとやかく言うつもりもない」

「だが本気じゃないのはダメだ。わかるか？ あの時あの受験会場で、お前だけが明確に本気じゃなかった。」

「……………」

全部凶星だから何も言い訳できない。このまま除籍か？ いや、それだったらもつと早くに言つたはずだ。じゃあ狙いはなんだ？

「そう黙り込むなよ。これで即除籍処分つてわけじゃあない。ただ、聞いておきたいだけだ。」

「お前はなんでヒーローになりたいんだ？」

言葉とは裏腹に鋭い目つき。そして威圧感。除籍にはしないつてのも合理的虚偽つてやつか？ 僕が何も答えられなければ、おそらく明日には僕の席は無くなっているだろう。

嘘や誤魔化しは通用しそうにない。目を閉じて、自分の根底から言葉を引っ張り出すと。



この世界に来て、全く周りに興味が持てなくて。何に対しても無気力だった頃のこと。

差し伸べられた手を握って、世界が一気に広がったこと。

爆豪香月という、僕の命よりも大切な、大好きな女の子のことを思い浮かべる。

「好きな子がいるんです。最高のヒーローになろうとしている女の子が」

「その女の子を守るように、傍で支えられるようになりたい。それが、ヒーローになりたい理由です」

言葉を切る。相澤先生も何も言わないので、無言の時間が流れる。……握った手が汗ばむ。

「ん、そうか。よくわかった」

ふっ、と相澤先生から放たれていた威圧感が消えた。つられて僕も肩に入っていた力が抜ける。

「除籍にはしない。だがお前、次からは何でも本気で取り組め。雄英は常に壁を用意する。最初から手を抜いてると癖になるぞ」

「今回のテストもそうだ。入試1位だった奴が、いくら何でも17位になるわけないだろう。お前、俺が個性を消しているのに気付いていたのに何も言わなかったな？ 個性抜きでも最下位にはならないと思っただらうが、それもやめろ」

「すみませんでした。次から気を付けます」

「よし、もう帰っていいぞ」

「はい、ご指導ありがとうございました」

一礼してから、背を向けて帰ろうとする。恥ずかしいね、どうも。舐めプしていたつもりはなかったが、知らず知らずのうちに驕っていたのだらう。反省しよ。

校門を出ると、かっちゃんが壁にもたれているのが見えた。

「あれ、かっちゃん？ どうしたのさ。皆とカラオケは？」

「別に。なんか気分じゃなかった」

「ひよつとして、僕の事待っててくれたの？」

「ああ!? 気分じゃなかったって言ったろうが！ ここらへんで暇つぶしして気分だったんだよ！」

いや草。どんな気分だよ。耳が赤くなってるし、ずっと待っていてくれたんだらう。やつぱかっちゃんは可愛いね。沈んでた心が元通りになるよ。

「で、どうだったんだよ」

「え、何が？」

「あのクソヒゲとの話だよ。合理的虚偽とか言ってたが、除籍うんぬんはアイツ、本気で言ってただろ。オマエもなんか沈んだ顔してるし、何話してきたんだ」

さすがだなあかつちゃん。荒っぽい性格してるけど、実は鋭いし、結構優しい。

「別に、大したことない話さ。ちよつと落ち込んだけど、それももう元通りだ」

「ほんとか？ テメエ、隠してんじやねえよ」

「隠してない隠してない。ねえかつちゃん」

「ああ？」

好きだよ。僕がヘタレだから言えたことないけど。

「入学おめでとうつてことでさ、一緒にカラオケ行かない？ 奢るぜ」

「ケツ、しよーがねーなあー」

「嬉しそうな顔して。気分じゃないんじゃないの？」

「うるっせえなあ！ てめえ行きたいのか行きたくねえのかどつちだ！」

かっちゃんとのカラオケはメチャクチャ楽しかった。歌も凄い上手いの、才能マンツで感じがするね。ちなみにA組のみんなも同じカラオケハウスにいたので、合流して皆で歌った。飯田君が国歌入れてて面白かったです。(コナミ)